

## 論文

## 沖縄本島における「字」のリアリティ

—— 南部ニュータウンの事例をもとに ——

牧 野 芳 子

## 〔抄 録〕

沖縄本島<sup>1)</sup>北部には、旧来の伝統ある集落である「字」に由来する自治会がある。それらの自治会では、自分たちの地域が「字であること」に対する自負と誇りを持っており、「字」内の自治に関する責任感も強い。反面それ故か、新規流入住民の受け入れに対し、閉鎖的排他的な面が見受けられるケースがある。筆者は、こうした地域意識を「字意識」として捉えてきた。一方、本島南部では、南城市に本土復帰直後、民間主導で開発されたニュータウンであるつきしろ地域が、2013年タウン内の字界を統合して「字つきしろ」となった。新規流入住民の集落であるつきしろが、なぜ「字」になれたのか。本稿では、つきしろ地域の建設から字の誕生までを概観し「字になること」の意味を考察した。結果として、つきしろが伝統的な住民とその集落の代名詞ともいえる「字」になった過程には、北部で捉えた「字意識」に通じるものが見られるのである。

キーワード：字、ニュータウン、自治会、字意識

## 1. は じ め に

沖縄本島において、「字」「自治会」「行政区」といった地域住民組織の名称は、それぞれの地域で独自のイメージで使われている。よって、同じ名称だからと言って同じものと捉えることは難しい。しかし、中でも「字」に対する意識には共通な特別なものとがあると、これまでの調査<sup>2)</sup>の過程で折に触れ感じてきた。筆者は、それまで主に本島北部の地域調査<sup>3)</sup>を行っており、その過程で「字」であるか否かということが住民にとって重要な問題の一つであると認識してきた。つまり、自分たちの集落が「字」であるということは、先祖伝来の土地と暮らしを守ってきた伝統的な旧住民である証であり誇りでもある。よって、そこに新たに住民が移住してきても簡単に仲間に入れたりはいしない。そうした新住民がつくった集落は容易に「字」

と呼ばないし呼ばせない。そうした背景の地域において、先祖代々居住してきた旧住民と、その「字」に流入してきた新住民とは具体的にはどのような関係を持ってきたのかということが、筆者の問題関心<sup>4)</sup>であった。そのような中、本島南部の南城市で「字」になったニュータウンの存在を知った。これは、今述べたような地域認識を通してみると、破格の昇格ともいえるべきものである。一体何がこのようなことを可能にしたのであろうか。本稿では、各住民組織の長や自治体、地域住民へのヒアリング調査<sup>5)</sup>と、住民組織が発行した記念誌、市町村誌、広報誌、地元新聞記事などの文献資料によって、ニュータウンが「字」になるまでの過程を概観し、「字になること」の意味を考察する。

## 2. 沖縄本島の住民組織

現代社会において「字」は、住所表記にさえあまり見る事がなくなっている。だが、沖縄社会においては、伝統的な地域住民とその居住地域、ひいてはその地域における住民組織の代名詞ともいえる存在感を持つ。そこに本土復帰後新たにできたニュータウンは、どのように受け入れられ「字」になることが出来たのか。本稿では、先祖代々「字」に居住してきた住民を旧住民、新たに字になったニュータウンの住民を新住民と位置付けて、「字になること」の意味について考察する。そしてその過程に、旧住民が自分たちの居住地域に対して持つ意識、すなわち字意識を見出すことで、沖縄本島における「字」のリアリティを明らかにしていきたい。

だが、そもそも「字」とは何か。「ニュータウン」とはどのようなものを指しているのか。この項ではまず、沖縄本島の地域住民組織を指す言葉について、先行研究を引きながら整理しておきたい。

### 2-1. ニュータウンとは

まず、「ニュータウン」であるが、この言葉からイメージするのは関東在住なら「多摩ニュータウン」、関西なら「千里ニュータウン」といったところであろうか。これらは集落というより、ニュータウンそのものが一つの大きな都市といえよう。しかし、本稿で取り上げるニュータウンはそのような大規模なものではない。そして、おそらく、それぞれの地域によって様々な「ニュータウン」が存在する。金子淳の『ニュータウンの社会史』(2017)によれば、ニュータウンの定義としては、広義のニュータウンと狭義のニュータウンがあるという。広義としては「何の制限もなく自由に名付けられた、郊外に立地する新興住宅地全般」を指し、狭義としては「設置主体・開発手法・規模の3点で一定の基準を満たしていること」とする<sup>6)</sup>。千里や多摩といったニュータウンは、この狭義のニュータウンに分類される。本稿で対象とするのは、広義のニュータウンで「大京ニュータウン佐敷つきしろの街」である。詳細は別項で述べるが、現在約490世帯、人口にして1,200人で、沖縄本島内外からの移住者によるニュータウンである。

## 2-2. 字

かつて沖縄は、現在の町村を間切り、その中の集落を村（ムラ）としていたが、明治の町村制施行<sup>7)</sup>により、ムラあるいはシマと呼ばれていた集落が字となる。高橋明善は『沖縄の都市と農村』（1995）の中で、北部大宜味村や中部読谷村を事例に、この字について次のように述べている。「沖縄一般にいえることだが、市町村行政機能が弱く、戦後復興を中心的に担ったのは字である」<sup>8)</sup>「字の活動を基礎に生活の再見と復興が行われ（た）」さらに復興後は、基地対策として「生活を拠点とした要求や抵抗運動も村人を結束させ」「住民の生活のための現代的な自治体としての性格を再生してきたと考えられる。」<sup>9)</sup>

つまり、太平洋戦争以降、米軍の上陸・占領から復帰に至る過程の中で、頼るべき国を失った沖縄の住民は、最も身近な地域住民組織であるこの「字」によって結ばれ、その共同により支えあって困難を乗り越えてきたといえる。よって、沖縄の住民にとって、「字」というのは、単に住所表記や地籍を表すだけのものではないと考えられるのである。

このような「字」に対する沖縄の人びとの意識を最もわかりやすく目に見える形にしたものの一つに「字誌」がある。本土においては「〇〇県史」「△△町史」などといった地域史はさほど珍しいものではないが、沖縄における「字誌」のように、市町村のような基礎自治体よりさらに小さい集落単位で地域史を発行しているところは本土にはほとんどないのではないだろうか。この「字誌」については中村誠司、末本誠らの研究<sup>10)</sup>に詳しい。

## 2-3. 自治会

中田実は、『地域再生と町内会・自治会』（2009）の中で、山崎丈夫・小木曾洋司と共に次のような定義を挙げている。「町内会・自治会は、原則として一定の地域的区画において、そこで居住ないし営業する全ての世帯と事業所を組織することを目指し、その地域的区画内に生じるさまざまな（共同の）問題に対処することをとおして、地域を代表しつつ、地域の（共同）管理に当たる住民組織」（（ ）著者）<sup>11)</sup>また、「任意組織であるために、生活のルールづくりや施設の維持管理法などについての共同の意思形成を『めざす』という不断的努力が必要」（『 』著者）<sup>12)</sup>とも述べている。だが、沖縄では字における自治会が「すべての世帯と事務所を組織」せず、むしろ会員を制限する<sup>13)</sup>ことによって共同の管理や意思形成を実現・維持している側面がある。

沖縄本島内では様々な「自治会」が存在する。例えば那覇市の自治会については、先述の『沖縄の都市と農村』（1995）の高橋勇悦らによって郷友会型自治会の存在が指摘されると同時に自治会の存在自体が少ないことも指摘され<sup>14)</sup>ている。つまり、加入率の低さというより組織率が低いといえよう。黒田由彦（2013）は「強い凝集性を持つ共同体型自治会」の存在を指摘<sup>15)</sup>している。仲地博（1989）は、住民の出自によって構成される読谷村の自治会を「属人的住民自治組織」<sup>16)</sup>と呼んでいる。この他、宜野湾市・浦添市・名護市などそれぞれの地域の事情に

即して実に多様な自治会がある。事例のニュータウンが存在する南城市においては、一集落を一行政区とし、そこに一自治会があるという形である。南城市は合併後もそれぞれの旧町村における呼称を維持させており、行政職員は対象地域に合わせて使い分けしているとのことである。

## 2-4. 行政区

本来行政区とその区長とは、東京 23 区の様な特別区や指定都市の区長を指すとされるが、森裕亮の論稿（2009）によれば、行政区長制度は「市町村内部の地域に設置される、いわゆる行政連絡機構としての区長及びその制度」<sup>17)</sup>であるとしている。先述の高橋明善は、読谷のシマを例に、シマ＝村＝部落＝字＝行政区としている<sup>18)</sup>。本島においては、字にこの行政区をかぶせ、その区内＝字内の住民組織の長を区長と呼んでいる場合が多い。前項で述べた南城市でも、市勢要覧等の表記は「行政区」としているが、大まかに分ければ、主に伝統の字由来の集落では自分達の地域の住民組織を「(行政) 区」と呼び、ニュータウンの様な後発的な集落では「自治会」と呼んでいることが多い様である。

## 3. 南城市の概要

### 3-1. 南城市の概要

沖縄本島南部に位置し、三方を海で囲まれ、東西 18km・南北 8km、面積 49.78km<sup>2</sup>、人口約 43,000 人・17,000 世帯である。琉球の創世神が降臨したとされる久高島・世界遺産の斎場御嶽（せーふあーうたき）を始め、市内には数々の城（グスク）が存在する。アメリカ軍占領期には米国陸軍軍政府や沖縄民政府が設置され、壊滅的被害を受けた那覇より先に高校が出来るなど、占領直後は沖縄の中心であった。現在その跡地に南城市新庁舎が建設され、その先の字つきしろ方面に向かって、那覇空港自動車道・南風原 IC から延伸した南部東道路が開通する予定である。この辺り一帯は、海岸沿いの部分との標高差が 130～150m あり、太平洋を望む高台である。



図1 Googleより執筆者作成

かつては、米軍基地や外人住宅などがあったが、本土復帰と同時に自衛隊に移管され、現在

市内には、陸上自衛隊那覇駐屯地知念高射教育訓練場、航空自衛隊那覇基地知念高射教育訓練場が存在し、基地内だけで約100人以上の隊員が生活している。

市内には「字つきしろ」を除いても70の行政区（自治会）が存在する。南城市では、自分たちの集落を「区」、「自治会」、あるいは両方使うなど名称は地域によって違い、行政は地域に任せており統一されていない。

南城市は、2006年1月、佐敷町・知念村・玉城村・大里村の合併により誕生した。誕生までには、2003年2月、佐敷町・知念村・玉城村・与那原町の2町2村による任意合併協議会を設置、「東方（あがりかた）市」と名称まで決まっていたが、市庁舎の位置で調整できず与那原町が抜けている。

### 3-1-1. 旧佐敷町

本稿の事例であるニュータウンつきしろの大部分（地籍は字佐敷<sup>19)</sup>）は、旧佐敷町に入る。つきしろを除く旧佐敷町地区の現在の人口は約1万人、4,380世帯である。中城湾に臨む馬天港は、南城市史によれば、かつて本島北部との交易船であるヤンバル船が寄港し、物流の拠点でもあった。大東島方面への航路もあり、製糖期には季節労働者の往来が盛んであったという。鹿児島商人の商店もあり、飲食店や遊び所で賑わった。日清戦争後は地理的条件の良さから、海軍の軍港となっている。占領期は、米軍人等の外人住宅があり、本土復帰後は、この港湾の一部を埋め立ててできた地域を1972年に「字新開」として承認している。その後1979年、ニュータウンのつきしろの部分が「13番目の字部落」として議会の承認を得ている。

こうした経緯を見ていくと、佐敷町という地域は、戦前から不特定多数の流出入者を受けられてきた地域であり、現代においても外部からの流入者に対して、比較的寛容であったのではないかと推察できる。

### 3-1-2. 旧知念村

ニュータウンつきしろの一部は、旧知念村内の字志喜屋に入る。つきしろを除く旧知念村地区の現在の人口は約4,900人、2,000世帯である。琉球開闢の神アマミキヨが降臨したとされる久高島や、今は世界遺産となった斎場御嶽（せーふあうたき）を擁し、その聖地を巡礼する旅は東御廻り（あがりうまーい）と呼ばれ、古より今も沖縄全土からの来訪者が絶えない。2017年夏季調査の際は、旧盆明けのヌーバレーという行事が行われていた。地元住民手作りの舞台上、地域の伝統文化である琉舞や芝居など様々な演目が披露される。中には、若い層による創作ダンスの様な演目もあり、旧来の伝統文化にこだわっていない様子もうかがわれた。知名区の会場では、有料ではあるが手作りのおにぎりや飲み物が振舞われ、地元住民でなくても分け隔てなく同様に歓待され行事を楽しむことが出来た。ただ、この旧知念村は、南城市によると那覇から最も遠いので、少子高齢化や人口減少が進んでいることが問題であるという。

先述した南部東道路の開通が待たれる。

### 3-1-3. 旧玉城村

旧玉城村の字垣花の一部も、ニュータウンつきしろの区画に入る。つきしろを除く旧玉城村地区の現在の人口は約 11,000 人、4,600 世帯である。市の新庁舎開設までは、市の中枢を担う総務課などがここ玉城庁舎にあり、市内全域の区長・自治会長が揃う区長会も開催されていた。先述のアマミキヨ上陸の地とも伝えられ、城（グスク）も多い。積み石の石垣や石畳の道、伝統的な集落形態を保存している前川区では、自治会主催で「むらおこし芸術祭」を開催し、地域在住の芸術家を応援している。一方で、区内には国内最大の鍾乳洞と言われる玉泉洞や沖縄ワールドといった観光施設も擁しており、区長は地域の公民館である「前川むらやー」を宿泊施設にし、もっと多くの人たちに来訪してもらって地域を知ってほしいと語っていた<sup>20)</sup>。復帰前は、CIA の秘密工作基地があり、玉城村長がその軍用地の地主会会長だったこともある。今はゴルフ場となり日本女子プロゴルファーのシーズン開幕戦が行われることでも有名だが、当時は基地労働者などの関係者が周辺に移住し、そのまま定住したりしている<sup>21)</sup>。

### 3-1-4. 旧大里村

旧大里村は、ニュータウンつきしろの一部ではないが、新しい「字」が成立した事例があるため、概要を説明しておこう。現在の人口は約 14,500 人、5,500 世帯である。2003 年の合併協議会が頓挫し、与那原町が抜けた後に入った。そのためか、村内の住民の中には、「大里は後から入ってきたと思われる。」と若干の不平等感を感じている住民もいるという。また、与那原町との結びつきが強かったとのことで、旧玉城村の住民によれば、合併後「(南隣の)知念村の行政職員は誰かわかるが、(北隣の)大里村の行政職員は誰かわからない。」という声も聞かれた。市内の中では最も那覇に近いこともあり、村内には「大里グリーンタウン」「第二グリーンタウン」「大里ニュータウン」といった 3 つのニュータウンと「大里団地」「大里第二団地」の 2 つの団地があって、5 つを合わせた人口は 3,600 人を超える。この中の「大里グリーンタウン」の自治会創立二十周年記念誌では、自らの地域を「字」と呼ぶ記述は認められないが、小学校の児童数や村関係の表などには「字別」の欄に「大里グリーンタウン」と表記されている。

そのような旧大里村で、字大里は字内に 3 つの行政区を擁していたが、つきしろが字になった後、そのうちの 1 つ平良区が 2015 年「字平良」として字別れしている。

### 3-1-5. 南城市のムラヤー構想

南城市に初めて入った時、市役所内某部署の嘱託職員の女性によって、いきなり話も聞かず「本土の人間が何をしに来たのか」と、結果として門前払いの調査拒否にあった。南部は沖縄



戦でも激戦地で多大な被害を被っている。やはりこうした態度は当然であり南城市の地域性も閉鎖的なのかと思ったが、その後、南城市民大学1期生OBの女性との出会いから、南城市のイメージが180度変わった。「南城市がそんな地域と思われるのは悲しい。南城はとても良いところ。それを是非知ってほしい。」と、市民大学の同期の方や市役所のまちづくり推進課の方など、関係各所にすぐ連絡をつけて戴いた。彼女は本土からの移住者、つまり新規流入住民であるが、市民大学の同期には、次項で述べるつきしろ出身の市議会議員や南城市地域物産館の店長がいて、大学が終わった今も当時のつながりが、様々な活動を通じて深く広がっているという。実際、その後、調査で市内各所を廻っているが、市民は何ら偏見もなく、みな協力的で前向きであった。

まちづくりに関わる活動もその一つで、紹介先の一つに「なんじょう地域デザインセンター」があった。そこは、行政と地域（区・自治会）を結ぶ役割を担い、センター長は日々地域を飛び廻っている。このセンター長とコーディネーターの女性も本土出身であるが、地域の信頼を得ている様子で、区長会の際には研修会の企画をし、市のまちづくり戦略である「ムラヤー構想」の具現化にも大きな役割を果たしている。「ムラヤー」というのは、「村屋」と書く場合もあり、旧玉城村の項でも触れたが、琉球王国時代のムラを管理する行政機関で、現在では地域の公民館・集会所・区や自治会の事務所を指す場合が多い。つまり、旧字由来の住民にとってなじみのある言葉ともいえる。『ムラヤー利活用戦略』（2017）によれば、南城市ではこの「ムラヤー」を、地域コミュニティ全体を指す言葉として捉え、地域の公民館である「ムラヤー」の整備や、そこを拠点とした地域の活性化を、地域のきづなの創出やコミュニティビジネスのプラン化などにより地域住民の手で実現できるよう勧められている。つまり、見方によっては、旧住民と新住民の融合にも有効な戦略といえるし、旧住民と新住民の共存が順調であるからこそ取れる戦略であると言えるかもしれない。

## 4. ニュータウンつきしろと字つきしろ

### 4-1. つきしろ地域の概要

元沖縄民政府跡地から直線で東に2.5km、沖縄刑務所から西に1.2km、南城市のほぼ中央の高台（標高約160m）に位置し、499世帯、人口約1,200人で、2013年4月地域内を分断していた字界を統合し「字つきしろ」となった。もとは、1972年本土復帰後、民間開発によってできたニュータウンであり、住民も本島内外からの移住者によって構成されている。投機目的での購入者もいたため、現在、地権者は北海道にまで及んでいる。そうした生活実態のない土地の存在やバブル崩壊、また、居住者の移動・相続等により空き地や空き家が増えたうえ、元々霧が濃く立ち込める土地柄でもあり、一時はゴーストタウン化した時期もあった。航空自衛隊基地に隣接しており、地域の作業に協力を得たり、自衛隊のイベントに参加したり、隊員が青



児童公園展望台よりつきしろの街を望む：筆者撮影

年会に入って行事に参加するなど日常的に交流がある。地域の有志による隊員の歓送会も行っている。

南城市誕生前、東方市の合併協議会では「つきしろを字に……」という提案もなされたとのことであったが、3字に分かれたままでのスタートになった。

#### 4-2. 「大京ニュータウン佐敷つきしろの街」の誕生

つきしろ地域は、高台の空き地だったところに「大京ニュータウン佐敷つきしろの街」として沖縄大京が1973年着手。1975年宅地造成が完了し、1976年入居が開始されている。1977年9月の佐敷村の議会の記録によれば「現在14軒、46名の村民が生活」とある。『記念誌つきしろの歩み』によれば、開発した大京は、1977年管理組合としての自治会設立を要望する。住民側は、それを受けて1978年自治会の前身である「育成会」を結成する。さらに、翌1979年佐敷村の行政区域として承認され、13番目の「字部落」として正式に自治会が発足している。

この自治会は、住民にとっては、いわゆる「区」であり、自治会長＝区長であったことから、「管理組合としての自治会」の設立を望んでいた大京と齟齬が生じた。大京は自治会という名の管理組合を作り、地域の管理を住民に任せる意図があったが、当時の少ない人口では、先行き500世帯以上の入居を予定している地域の管理は、その時点では無理であった。また、つきしろが行政区になる前、いわゆる親字である字佐敷との間に「連絡道路」を



連絡道路取付予定だった斜面：筆者撮影

作る予定であり、建設されれば、標高差150～160mの両地域の間を約700mで行き来できる



はずであった。だが、建設予定の斜面は地滑りの危険性が高く、字佐敷側には民家や小学校があり、地域の反対が強かったため諦めざるを得なかった。現在も約4km迂回<sup>22)</sup>をしなければ佐敷側に降りられない状況である。このような問題も含め、区長をはじめとする住民と大京、行政の三者会談が繰り返し行われたが、その過程で、住民間に内紛が起こったこともあった。その後も、地域の管理に関して様々な問題が起きる。管理費の未納者が増えたことで、1990年大京は、運航していた通学バスの廃止を通知、1991年管理委託の解約の申し入れをするなどの処置を取る。だが、その都度住民が署名を集めるなど一丸となって、行政や企業と根気よく話し合い、解決に向け努力していることが、記念誌から伺われる。

また佐敷村の議会報によれば、この他にも行政区になる前から、連絡道路設置や、バス路線の推進、公民館建設などの問題が議員から質問されている。地元つきしろ出身の議員が選出されるのは1998年のことであるので、質問している議員はつきしろ以外からの選出ということになる。その辺りの人間関係は不明であるが、つきしろ地域に対して、当時の村議会会報（1978年6月20日、第34号）には次のような記述もある。

「つきしろのニュータウンは村（当時は佐敷村）の1種の誘致事業であり、もちろん佐敷部落が決定したものに対して村を仲介として契約を交わしたいきさつがありますので当然村の誘致事業である。一中略— 行政区域も敷かれてない現状ではもちろん字佐敷である。」

つまり、つきしろは建設前から、地域の一部として受け容れられていたとも考えられるのである。

#### 4-3. 「字つきしろ」の誕生

合併前は、佐敷町内の独立した行政区であり、玉城村内は垣花区、知念村内は志喜屋区に分かれており、合併後「字つきしろ」になるまでは、住所表記も旧町村の字名であった。3町村の境界線の問題は、1979年1月の佐敷町議会の記録にもあがっており、「隣村との話し合いが進んでいる」といった記述が見受けられるが、その後の経緯や詳細は不明である。2003年2月、佐敷町・知念村・玉城村・与那原町の2町2村による任意合併協議会の際も「つきしろを字に」という提案がなされていたが、この時は合併自体がなくなってしまった。

合併後も3字に分かれたままでは、ごみの収集日や郵便番号、校区の違いなどで不便が多く、何より一体感を持てずにいた。代々の自治会長も鋭意努力してきたとのことだが、「お金がかかる」等の問題で具体的に進まなかったという。また、合併後は旧町村名を南城市の後に付け、その後に字名をつけるという住所表記であったので、3字を統合するとなると、最も面積が大きい「字佐敷」に統合されるのではないかという不安や諦めを語る住民もいたという。

そこで、現自治会会長（以下会長<sup>23)</sup>が、住民の「一つになりたい」という声を受けとめ動

き出す。住民へのアンケートを実施して、「一つになりたい」という意思が住民の総意であることを明確にするとともに、総会等で話し合いを重ね、問題点の説明や理解を得ていったのである。住民の疑問や不安の一つ一つを受けとめ、市役所等に日参し、何が問題なのか、どうしたら解決に向かうのか具体的に何度も何度も聞いたという。住民の疑問や自分がわかったことは、すぐ自治会会報などを通じて、住民全体で情報を共有できるようにした。行政側も地域住民の本気度が伝わり、何ができるかを協議した。旧佐敷町佐敷区や旧玉城村垣花区、知念村志喜屋区にも理解を求め、協力を得ていったとのことである。字つきしろという地域の悲願を達成させた会長の理念は、自ら行動することで相手に示すことであった。

2018年8月29日、つきしろ公民館において、会長は次のように語った。

「よく、きょうどうのまちづくりというが、きょうどうのまちづくりというのは、自分たちのことは自分たちでやるということ。だったら（いま自分たちでやっていることは）普通だと思う。最初は、（行政に任せず、自分たちでやることで）「行政サービスを放棄するのか」という話もあった。この集落は環境汚染とかあった。（だから）「自分たちのことは自分たちでやっていかないと（よその集落と）肩を並べられないよ～」ということ。行政サービスを放棄するのかという人たちも徐々に変わって来て協力するようになった。内外からの目も、「あ、つきしろ変わったね。」と。ということが耳に入ってくる。だから、物議を言った人たちも理解する。続けること。これは難しい。だから二つです。行動することと続けること。ひとこと言ったこと。口では言うけども、続けなければ意味ないです。途中で止まった時には、また元どおりになってしまう。逆に信用がなくなってくるし。今、確固たるものになってきているんですよ。」（傍点筆者）

では、具体的にどのような取り組みをしていったか見てみよう。まず一つ目は、健康づくりを軸として地域づくりを進める取り組みである。つきしろ地域は健康診断の受診率が低かった。地元新聞記事によれば、2007年の健診率は12.8%である。当時健康づくり推進委員長だった会長は、かつて自宅外へ勤めに出ることもできないほど体を壊した体験を持ち、健康増進への関心が大きく、マラソン<sup>24)</sup>を通じて自身の健康維持や人間関係を作ることに取り組んできた。その得意分野を活かして、地域の健診率アップという目標を立てた。住民に、地域づくりのために行動して貰おうと呼び掛けるのではなく「あなた自身の健康のために」と呼びかけたという。だんだんその気になる住民が増え、結果として健診率が上がるという地域づくりに繋がったのである。65%にもなった健診率というのは誰の目にも見える数字であり、それがまさに目に見えて上がっていく。こうした努力の成果は、地域住民はもちろん、周辺住民にも伝わる。「つきしろはすごいね。」と周囲に褒められたり認められたりする経験が、地域への愛着に繋がっていくと会長は言う。そして当然、個人個人の健康への意識や理解も深まり、あがった健

診率は一時的なものではなく、維持可能な成果になる。

2つ目は環境美化への取り組みである。先述したように一時はゴースタウン化した地域であったが、地域内を走る主要道路沿いに花を植えたプランターを配すなど、地域の魅力づくりに取り組み、住みたいまちになることで入居者を増やそうとしている。2010年から始めた取り組みで、2013年の新聞記事には「花の街として知られるつきしろ……」と記載されており、2016年には県道の清掃・植栽への尽力に対し国土交通大臣表彰を受賞している。これも、まず、会長が一人でもリヤカーを引き地域清掃や花を植える姿を、住民が見かねて手伝ったり、自分のできる時間に協力したり、青年会が協力するなどして続けてきている。そ



公民館前で配置を待つ花苗：筆者撮影



作業用リヤカー：筆者撮影

こには作業が住民全体に公平になるような共同作業的なやり方はない。出来る人が出来る時間に来ることをするという。それがだんだん住民間に増え広がってきた。花の苗も、費用が掛からないように、各所に協力を仰いだり、事業に応募するなど工夫をしている。会長は「自分の仕事（の一つ）は（応募や申請の）書類を書くこと」とも言っている。

3つ目は、環境改善としてはかなり思い切ったユニークな取り組みである。空き地空き家対策として、住民による「つきしろ共同企業体」という管理組織<sup>25)</sup>を立ち上げたことである。遠方の地権者に現状を伝えて管理を委託してもらい、草取りや剪定などの作業を行い改善していく。場合によっては管理が出来ず困っている地権者と土地家屋を欲しがっている人との売買の仲介をし、新しい住民の増加につなげる。地域がきれいになることで、自然と不法投棄も減り、更に住民の意識も変わった。

地域の青年たちも児童公園の整備に取り組んだ。当時の自治会の文化部長が呼びかけ、花を植え、照明やトイレを修繕し、イルミネーションを企画した。「育ててくれた街に恩返しをしたい」「作業を通じて後輩を育成する狙いもあった」という。彼はその後南城市の市議員となった。

また、先述したが、隣接する自衛隊にも、広大な空き地の除草や清掃に協力を仰ぎ、共同作業によってつながりも出来ている。その様子は自衛隊のHPにも掲載されている。

## 5. 字になるということ

こうした調査の概要を踏まえて、もう一度「字になること」の意味を考えてみよう。

つきしろが「字になった」ということは、「字」という存在になることそのものが目的であった訳ではない。3つの字に分かれていることを、日常生活の中で常に意識させられる現実があるままでは、いつまでも一体感が持てなかったので、一つになりたかったからである。だが、一つになるとしても、住民の割合の多い「字佐敷」に他の2字が統合されるということでは、やはり「一つになった」とは言えない。3つの字が、対等の立場で一つになるという意味での「字つきしろ」の誕生が必要だったと考えられる。それは、単に字界や地籍を変更することを意味するのではなく、3つの字が一つになり、新しい字を形成するという事実が、住民の結束や地域の活性化にさらに弾みをつけることに繋がっていると考えられるからである。だが、つきしろにとって、「(旧来の字と同様の) 字になること」そのものが目的ではなかったとしても、地域が一つになる過程には、沖縄における「字」に対するイメージの共有があったからではないだろうか。それは、「字つきしろ」を実現した会長が語った中にあった「他の地域と肩を並べることが出来る。」という言葉からもうかがえる。また、つきしろニュータウンの先人たちによる弛まぬ努力の上にこの地域が成り立ち、その地域で育てられたという自覚が調査の中で見いだされた。このことは、北部の字においてよく見聞した「先祖代々の土地」「先祖が苦勞して維持してきた共有財産」などの言葉で、旧来の住民であることの証や誇りを語る姿に重なる。「自分たちのことは自分たちでこそ自治」という言葉も、「字」の自治に関する責任感の強さに繋がる。

当初「字になった」つきしろに対して、「字に昇格した」すごい地域という印象があった。それは、本島北部の調査の中で、自分たちの集落が「字であること」に対する強いこだわりや意識があることを知ったからである。だが、南城市の概要で幾つか挙げた例にも見えるように、南部の「字であること」へのこだわりは、北部ほど強くはないようである。つきしろを早い段階で「字 (= 区・自治会)」として認定した旧佐敷町は、他にも、埋め立てによってできた新たな地域・集落を「字新開」として認定している。南城市になってからは、つきしろに続き、旧大里村で新たに「字平良」が誕生している。この「字」はつきしろとは成り立ちが違うものの、つきしろが字になったことによる影響はあるといわれ、つきしろの時の経験が活かされた部分もあるという。このような、新規流入住民を受け容れる姿勢の柔軟さも「字になること」を可能にする要因の一つであると考えられる。

## 6. ま と め

つきしろが「字」になることが出来た背景には、確かに、現会長の非凡な行動力とリーダー

シップがあったことは確かである。だが、それだけで実現できたのかという問いには、筆者は否と答えたい。その根拠が冒頭で述べた「字意識」の存在である。前項でも述べたが、「字になる」ためには、自分たちの地域がどのような地域であるのか。さらにはどのような地域にしたいのかという意識の共有が必要である。自分たちの集落が「字」であるということは、先祖伝来の土地と暮らしを守ってきた伝統的な旧住民である証であり誇りでもある。この事例を通して見えてくるのは、沖縄本島における住民の生活の中にある「字」のリアリティである。

冒頭で取り上げた本島北部で見られる旧来の字の閉鎖性は、見方によっては新住民への差別ととられかねない。だが、その背景には住民をはじめとする土地や共有財産などの地域資源、すなわち地域そのものを守り、後世につなげようとする強い責任が感じられる。実際閉鎖的であっても、排他的とは少し違い、調査に対しても「何度も足を運んでくれて、地域を知ってもらうのは嬉しい。」と迎えて戴いている。20年以上前に高橋明善(1995)が指摘したように行政機能が弱かった沖縄においては、行政の考えとしても、そのような責任感の強い字由来の行政区やその字に肩を並べるべく努力してきた自治会の自治能力に任せる方が統治しやすいことを、これまでの長い歴史の中で学んでいると言えよう。本土の感覚で言えば、「今どき『字』か?」と疑問を持たれるかもしれない。しかし、ニュータウンや新集落を旧集落同様に「字」に認定することは、沖縄本島におけるまちづくりにおいて言わば先進的な取り組みともいえる側面がある。ただ、南城市としては市内に70の行政区は多いと考えている。しかし、統廃合して減らすことの難しさもわかっている。そこにさらに字化の問題がどう絡んでいくのか、今後の動静を見守っていく必要がある。

字の旧住民は、今田高俊(2017)の言葉を借りれば「共通の価値規範による拘束を前提にした共同体」<sup>26)</sup>の住民といえる。つきしろにおける取り組みも、この「(共通の価値規範による)拘束を前提」としたものであったら、住民はまとまらなかったかもしれない。「出来る人が出来る時に出来ることを出来る範囲です」という個人の自主的な関わりを引き出す取り組みの在り方は、今田(2017)の言う「個人化のもとで共同性が成り立つために」必要な「相互的な気づかいと支えあいに準拠した『つながり』や『絆』」<sup>27)</sup>を生み出したのではないか。こういった視点も含めて、筆者の考える「字意識」について、集められた資料の再検討や、地域住民の属性によってその意識が具体的にどう捉えられているか等さらなる聞取りを今後の課題とした。

#### 〔注〕

- 1) 本島・本土といった表現は、中央と周辺という受け取り方をされ誤解を生む可能性があるが、本稿においては、論述内容の理解を助けるために、あえてこの表現を使っている。
- 2) 2012年2月～2015年度：主に本島北部、2016年度～：主に本島南部
- 3) 米軍基地を抱える金武町・宜野座村・恩納村へのヒアリング調査
- 4) 牧野芳子 「自治組織と「排除」に関する一考察——沖縄本島北部における共有地をめぐる問題」



- 2015 佛教大学大学院紀要 社会学研究科編 第43号  
—— 「南城市の軍用地と地域社会」 2018 『沖縄県の自衛隊及び米軍所在自治体における地域アソシエーションの実証的社会集団研究』 研究成果報告書 第二輯
- 5) 2017年2月23日 10:30～ 2018年8月29日 10:00～ 南城市役所総務課・まちづくり推進課  
11:20～ 2018年8月29日 11:00～ なんじょう地域デザインセンター  
2017年2月24日 10:30～ 南城市民大学一期生 OB, 南城物産館店長  
13:30～ つきしろ自治会長, つきしろ出身市議会議員  
2017年8月29日 13:30～ つきしろ自治会長,  
2017年8月30日 15:00～ 佐敷自治会長  
2018年2月6日 14:00～ 志喜屋区長  
2018年2月5日～3月10日 南城市内複数区・自治会にて調査実施  
筆者他1～2名の社会学者と共に聞き取りを行う。
- 6) 金子淳 2017 28～29p
- 7) 地域によって差はあるが、本土では1889(明治22)年市制町村制公布、沖縄では1908(明治41)年沖縄県島嶼町村制を出す。さらに1920(大正9)年市町村制が改正され、本土並みとなる。
- 8) 高橋明善 1995 第8章「北部農村の過疎化と社会・生活変動」 244p
- 9) 高橋明善 1995 第9章「基地の中での農村自治と地域文化の形成」 314p
- 10) 中村誠司 「沖縄の地域史・字誌づくり」 2002 『沖縄の社会教育——自治・文化・地域おこし』  
小林文人・島袋正敏編 エイデル研究所  
末本誠 『沖縄のシマ社会への社会教育的アプローチ——暮らしと学び空間のナラティブ』 2013  
福村出版
- 11) 中田実他 2009
- 12) 中田前掲書
- 13) 北部の字自治会の中には、移住から2～3年様子を見て、字内の旧住民1～3名の保証人を付けて初めて入会が総会で許可されることを会則に掲げているところもある。また那覇市内でも旧字由来の自治会の中には、新会員の入会を全く認めていない自治会もある。
- 14) 高橋勇悦 1995 第6章「都市社会の構造と特質——那覇市の「自治会」組織を中心に」
- 15) 黒田由彦 2013 第10章「自治会と郷友会——沖縄県那覇市」
- 16) 仲地博 1989 「属人的住民自治組織の一考察——沖縄県読谷村の事例」
- 17) 森裕亮 2009 85p
- 18) 高橋明善 前掲書 第9章 313p
- 19) 琉球三山を統一した尚巴志とその父の居城であった城がある。つきしろに隣接する航空自衛隊基地の中にはその父や家族の墓である史跡「佐敷ようどれ」があり、字佐敷の共有地であるため、字佐敷には共有財産となる軍用地料が入る。
- 20) 2018年2月6日、前川区公民館における区長への聞き取り調査。
- 21) 2018年2月8日、ゴルフ場に隣接する親慶原区の公民館における区長への聞き取り調査と、当時の新聞記事、および、琉球ゴルフ倶楽部記念誌よりまとめる。
- 22) 隣村の玉城や大里を通るルートになる。
- 23) 2010年就任。その信念と行動力は島内でも有名で、講演会が開催されたり、北部の自治会からも多数の人々が話を聞きに来たり「彼のようにになりたい」と語る自治会長もいる。
- 24) 健診の受診とメタボリック症候群の撲滅を県下に訴えるため「一人で沖縄一周マラソン」に挑戦。466.2kmを完走した。
- 25) つきしろのHP 参照

- 26) 今田高俊 2017 37p
- 27) 今田前掲書 39p

〔参考文献・資料〕

- ・今田高俊 「個人化のもとで共同体はいかにして可能か」 2017 『学術の動向』 日本学術協力財団
- ・大里グリーンタウン自治会 1998 『大里グリーンタウン自治会創立二十周年記念誌』
- ・沖縄県庁知事公室基地対策課 2017.3 『沖縄の米軍及び自衛隊基地（統計資料集）』
- ・『開場 10 周年記念誌 1987 歩み』 1988 琉球ゴルフ倶楽部
- ・金子淳 『ニュータウンの社会史』 2017 青弓社
- ・佐敷村議会 1977～1981 『佐敷村議会報』
- ・全国市長会 2017 『市政』
- ・つきしろの街自治会 1999 『つきしろの歩み「つきしろの街」20 周年記念誌』
- ・中田実・山崎丈夫・小木曾洋司 『地域再生と町内会・自治会』 2017 自治体研究社
- ・仲地博 「属人的住民自治組織の一考察——沖縄県読谷村の事例」 1989 『裁判と地方自治』 敬文堂
- ・南城市役所総務課 2013 『ひとにやさしい なんじょう情報マップ』
- ・『南城市史（通史）』 2010 南城市教育委員会
- ・南城市市勢要覧 2010・2014 南城市
- ・『ムラヤー利活用戦略——ムラヤー利活用戦略及びコミュニティビジネス調査業務 報告書』 2017 南城市
- ・森裕亮 「地縁組織と「公的地位」——行政区長制度に焦点を当てて」 2009 『北九州市立大学法政論集第 37 号第 1 巻』
- ・山本英治・高橋明善・蓮見乙彦編 1995 『沖縄の都市と農村』 東京大学出版会
- ・琉球新報、沖縄タイムス
- ・南城市 HP・天空の楽園つきしろ HP・航空自衛隊知念分屯基地 HP

〔付記〕

本稿は「沖縄県の自衛隊及び米軍所在自治体における地域アソシエーションの実証的社会集団研究」（科学研究費補助金基盤研究（B）研究代表：平井順，課題番号 JP16H03706）の成果の一部である。調査にご協力いただいた方々，貴重な資料を提供戴いた方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げたい。

（まきの よしこ 社会学研究科社会学専攻博士後期課程）

（指導教員：近藤 敏夫 教授）

2018年9月27日受理